
夏の匂い

日々楽々

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の匂い

【Nコード】

N3878C

【作者名】

日々楽々

【あらすじ】

なんだか思いついてなんとなく書いたお話。割と気に入っちゃいましたけど（笑）

私はいつだろう。

よく覚えてないが不意に訪れる匂いを感じるようになった。

それは結構楽しいもので、ウンコ臭いものから花のようなさわやかな物までたくさんあった。

そして今わたしは中学一年生である。

たまに臭うその臭いの事を友達に言ったら、いつのまにかクラスみんなが知っていて私はみんなに避けられた。

そのうち学校全ての人、もちろん先生もさらには一部の保護者までもが私の事を知っていた。

その臭いの元を知ったのは中3の冬だった。

そのときは嫌われているからみんなより二時間ほど遅く登校した。

その日は異常に寒かった。

「……………」

嫌われている理由が分からなかったからその当時は自分の心情を口にすることはほとんどなかった。

そんな私の癖は人間観察とか周りを注意しながら見ることであったりする。

小、中といじめられている私にとっては、虐つ子に見つからないように注意して歩くのがクセになってしまったのだ。

しかし、私はその癖のおかげでたくさんのお事を人より多く、詳しく見られたと思う。

そして今日も見つけてしまった。

多分子どもがほったんだと思うが、公園の砂場に私の頭が入るくらいの幅の大きな穴が開いていた。

その穴は多分私の腕を精一杯のばせば届く程度だろう。

多分とかだろうとかの推測のような言葉を使ったのは子猫が底にい

たからだ。

私はその猫に手を延ばし穴から出してあげた。別に助けてあげようとしたわけではない。

そのふわふわした体を触ってみたかっただけだ。

「にゃー」

猫が鳴いた。

それだけでどんな緊迫した場所もなごんでしまう。これが癒し系というやつだろう。

私は猫を抱きしめた。

「ねえ猫さん。何で私は嫌われてるんだろう。私は別にこのよくわからない臭い以外は普通の人間なのにね」

自分で言ってる悲しくなってきた私は猫の背中に顔を埋めた。猫はいい臭いとは言えないが、別にすごく臭いとは言えない。そう、例えるなら土の臭いの埃っぽさをなくしたような臭いだった。

「佐々木！何やってるんだ！早く学校に入りなさい！」

今更ながらだが、私の名前は佐々木鈴華である。

あだ名は

「くさ華」

私を気味悪く感じる人がつけたんだと思う。

臭いのせいで私を気味悪く感じる人は沢山いる。しかし、臭いのおかげでできた友達も沢山とはいえないがいるのだ。

私はすこしこの臭いに感謝していた。

簡単に気の合う友達、困ったときに助けてくれる本当の友達を与えてくれたから。

今日も授業は全て寝て過ごした。

でもそんなことをしても教師は怒らない。教師も私のことを気味悪く感じているからだ。

「よおくさ華ちゃん？今日はどんなことさせてくれるのかな？」
今日も来た。小学校から私のことを虐めてくる。

しかし家は金持ちだからどんなに虐められても金で事実を変えられ

る。

そしてこいつはいつも夏のおいがする。なんだか懐かしくて、だけど嫌いなにおい。

「なにもさせないよ」

そして私はいつもの言葉を言う。

言ったあとは逃げる。

力勝負では勝てないから私はいつも罠を仕掛ける。

いつもの曲がり角。いつもは網だが今日は違う。

来るときに見つけた小さな穴だ。

そこを指して角を曲がったときに嗅いだ覚えのある土の匂いの埃っぽさを無くしたような臭いがした。

しかし、そんなことを気にしてる暇もないのですぐに目的地に行く。目的地に着いたら膝に手をあてて疲れた振りをする。

そしてすぐに今日も引つ掛かった。穴の掘ってあった砂場には、ぐしゅぐしゅの泥が入っていて、その上にはれないようにビニール袋に石を入れた物を被せておいた。

なぜかはわからないがいつもそれで成功するのだ。

しかし、いつもと結果が違った。

「やつと追い付うおっ！」

穴に驚いたボンボンが私の服の裾を引つ張ったのだ。

しかし私はその時それどころではなかったのだ。

なぜなら。今朝の猫が乗用車にひかれたその瞬間を見てしまったから。

「こんなことしてくれやがってよ。もう何されても文句言つなよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！なんか言えよ！」

そう言つて伸ばしてきた手を振り払つて私は走った。

「おい！待てよ！」

連れが言つたが気にしない。

途中で転んだが気にしない。

すり剥いた膝が怪我の存在を主張するが無視する。

私は猫が死んだことについて悲しんでいるわけではない。

ただ。猫が死ぬ少し前に感じた匂いは絶対その猫のものだった。

そして猫がひかれた瞬間全てがスローモーションになりずいぶん昔の記憶が思い出された。

小学生の頃の記憶。

幼稚園の頃から大切にしていた一つの本当の親友。

君は泥のような臭いだったね。

たしか私がドシャ降りの雨のなか転んだときに水たまりの中に落ちてしまったんだっただね。

君が燃えてなくなる少し前も君の泥のような臭いがしたよ。

私を感じるこの臭いは嗅いだことのあるものが無くなるときの臭いだったんだね。

ありがとう。私の大好きだったクマちゃん。

君のおかげで臭いの原因がわかったよ。

私は家に帰ってすぐに自分の部屋に入り布団に潜った。

私の頬を生ぬるいものが流れ落ち息が苦しくなる。息が吐きづらい。

私は布団に頭まで潜り込みついでに涙を拭き払う。

布団の中は真っ暗だった。

目を閉じようと開こうとなにも変わらない。

死ぬところなるのだろうか。

ある漫画でやっていた。

人は死ぬと『無』になるのだそうだ。

しかし『無』とは真っ暗なものなのだろうか。

私はそうは思わない。

色も思考もなにもないのだろう。

だからこそそんなところは理解できない。

そんなところよりはまだ天国や地獄の方が想像がつく。

しかし地獄とは沢山の苦しみを・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
はっ！

難しいことを沢山考えてたつもりだが寝てたようだ。

わたしはお腹が減ったので起きたばかりのだるい体を無理矢理起こして目を擦りながらキッチンに行こうとした。

私の両親はもういない。

二人は離婚して私は父の方に引き取られたのだが、父はすでに白血病で2年前に死んだ。

だから今は母からの雀の涙ほどの仕送りと自分がバイトしてかせいだ金で暮らしている。

そんな私のいつもの食事はオムレツとチャーハン時々ピラフ。

今日もそれらを作り御膳に並べたところでインターフォンが鳴った。昨日母が頼んだと言っていたストーブだろうか。

「はぁーい」

そう言つて玄関に向かうとそこにはイジメグループのリーダーがいた。

「・・・・・・・・・・なに？」

私が少々睨むような目付きになりながら言った。

「いや・・・・・・・・・・大丈夫なのかなって」

「なにが？」

私はそんなリーダーの心遣いに少々どころか混乱しそうなほど驚いた。

それと同時に少し動悸が激しくなった。

「いや、なんでもねえ！元気そうだからいいや。じゃな」

そう言つてリーダーは風のように走り去っていった。

少し表現が古いように感じるがしょうがない。本当に風のように早かったのだから。

しかし私はそれどころではなかった。

激しく動く心臓を止めるのに精一杯でこのときはさっきまで泣いていたのを忘れるほどだった。

「なんなのよ！これ！」

そう言つて軽く中学生にしては少しばかり膨らんだ胸を抑えて正体不明のドキドキを抑えようとする。

そしてまあまあうまく作れたチャーハンとオムレツを食べる。

しかし心臓の動きを整えようとしている私にはどんな味だか全くわからなかった。

そして風呂に入ったあと食べた気がしないのでまた作ってたべた。いったいこれはなんなのだろう。

ふと気になって自分のにおいを嗅いでみた。

あいつと同じ、懐かしい夏のおいがした。

なんだかそのことに嬉しくなった。

本日の食費約300円OVER

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878c/>

夏の匂い

2010年10月9日02時20分発行